



令和八年度 国 語

問 題 冊 子

注 意 事 項

- 一 監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 問題冊子は、15ページに組んである。落丁、乱丁及び印刷不鮮明なものがあれば、すぐに申し出ること。
- 三 全ての解答用紙に必ず本学の受験番号、氏名を記入すること。各解答用紙に受験番号欄と氏名欄がそれぞれ1箇所ある。
- 四 解答は、解答用紙の指定された解答欄に記入すること。異なる解答用紙・解答欄に記入されたものは採点されない。
- 五 記入した解答用紙は、裏返して机の上に置くこと。
- 六 解答用紙の※欄は記入しないこと。
- 七 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

—
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先日こんなことがあった。特に喫緊^①ではないのだが、部屋が手狭になったからという理由で僕は引っ越しをしようとしていた。気に入った物件があり、不動産屋で手続きをした。しかし、まもなく不動産屋の担当者の方から「すでに一、二番手様がいらつしやいますため三番手様での受付となります。一、二番手様が成約もしくはキャンセルになりましたらご連絡いたします」とのメールが来た。先客がいた。その人たちが断らない限り、順番は回ってこない。そのとき、ふと「そうか、いまはそのタイミングではなかったのか、たしかに予算より多少オーバーしていたし、この物件とは縁^②がなかつたのかもしれない」と考えた。

科学の外部に位置づけられる「物語」という概念をあれこれ考えていた僕は、自分で少し驚いた。この出来事を物語的に捉えていたのだ。それもあまりにもナチュラリに。

「縁^①であったり、「神のお告げ」であったり、「神の計らい」、あるいは「天の導き」、「天の配剤^②」など、なんでもよいのだが、大袈裟^{おおげさま}かもしれないようなそんな物語をまさにそこに読み込んでいたのだ。そのような物語を心に浮かべていたことに気づいて、そこで僕は知る。気に入った物件だったが、いまの住み慣れた住居を離れ、新しい家に住むことに対して、どこか不安があったのだな、と。この物件にするかどうか、あるいはそもそもこのタイミングで引っ越しをするか否かということ自体を実は僕自身迷っていたのか、と悟る。だから、三番手での受付であることにながっかりし、もつと早く申し込めばよかったという後悔と同時に、これでよかったのかもしれないという感情が湧き上がったのだ。

こういったことは誰しもあるだろう。僕もこの出来事に際して、小さな物語を作り出していた。偶然の出来事に対して、それを合理化するためのささやかな物語を作り出していた。科学的根拠や合理性のない物語という意味では、多少オーバーな表現かもしれないが、小さな神話^①といってもいい。この物件に住む権利を先に押さえている人がいる、という出来事をただそのまま捉えるのではなく、そこに付帯する物語性、言い換えればメッセージ性をも見出していたのだ。

a

的に見れば、これは何の面白みもない、ただの味気ない出来事となる。業者からのメール通りの出来事であり、そこには何の意味も含まれていない。しかし、人の心は自然とそこに物語を見出す。思い通りにことが運ばないことを受け入れるために、あるいは偶然の出来事を必然の出来事として合理化するために、僕は物語を口にする。

もしかしたら、あのままあの物件に引っ越していたら、何かしらのよくない出来事が起こっていたのかもしれない、あるいは、私の人生が私の人生らしくない展開を見せていたのかもしれないといったように、「三番手での申し込み」という出来事を、未来の出来事と結びつけて想起していたと言える。現在の出来事を「想起」というのは、一見筋がとおっていないことのように聞こえるかもしれない。

そのことを説明するために、ここで物語の簡単な定義を述べておきたい。

哲学者アーサー・C・ダンターは、「物語文」という概念装置を提示した。それは、例えば、次のような二つの記述の比較から見えてくる。

D₁ ジョーンズはマッチを擦った。

D₂ ジョーンズは自分の小隊の位置を敵方に知らせてしまい、それまで保っていた戦略的利点を、不注意で失った。〔原注〕

記述D₂のような文が「物語文」である。二つの記述の間の差異を見てみよう。二つの文はともに、「ジョーンズがマッチを擦った」という出来事に関する文となっているが、記述D₁は字義通りの記述であるのに対し、記述D₂という物語文は因果連関を含んでいる。つまり、「マッチを擦ったこと」と「戦略的利点を失ったこと」の間の因果関係を述べているのである。言い換えれば、記述D₁はある出来事を孤立させて、単独で述べているのに対し、記述D₂はある出来事と他の出来事を一つに繋つないで述べていると言える。

重要なのは、おそらく僕らが通常のコミュニケーションの文脈で語り出すのは記述D₂のような文であるという点である。ある人から、このジョーンズの顛末を聞かされたとする。「そのとき、ジョーンズはマッチを擦ったんだよ」とだけ言われたとすると、聞き手は当然、ジョーンズおよびその周囲の人間たちに起こったその後の展開が語られることを予期するだろう。つまり、そのマッチを擦ったという出来事が何を意味するのかがこのあと語られることを期待するのである。僕らはコミュニケーションの中で、語られたものが何を意味しているのかを知ろうとする。

ダントーはこう記している。物語文の「最も一般的な特徴は、それが時間的に離れた少なくともふたつの出来事を指示するということである。このさい指示された出来事のうちに、より初期のものだけを(そしてそれについてのみ)記述するのである。通常それらは、過去時制をとる」(原注²)。

なぜ過去時制なのか？ それは、物語文とは、

X

だからである。つまり、物語とは、ある出来事

と未来の出来事を一つに繋ぐための文(および文と文の連なり)なのである。実際、先の引越しの場面では、僕は「三番手での申し込み」という出来事と、やがて起こるかもしれない「何かしらのよくない出来事」あるいは「私の人生が私の人生らしくない展開を見せる」といった未来の出来事を連結させ、想起していた。そしてその物語は、基本的には何かしらの原因と結果、ある出来事とそれによって引き起こされる未来の出来事という二点を因果連関という線で結び合わせる作用を持つ。語り手によつてある出来事が単独で語られる。すると聞き手は、「それはいったい何を意味しているのか？」と問う(あるいは自問自答においても)。この問いかけは、すべてではないにしても、多くの場合、その出来事によつていったいどのような出来事が引き起こされたのか、という問いかけと等価だろう。

おそらく、そのような問いかけの形式が僕ら人間の認知の形式となっているのだ。なぜなら、その因果連関を把握することによつて、今後起こりうる同種の出来事への対処法が見えてくるからだ。教訓を引き出すためといつてもいい。だとすれば、物語とはホモ・サピエンスという種に備わった、生存のための方途なのである。本能だけでは対処できないくらいに、ホモ・サピエンスは行動範囲を拡大してきた。社会を作り出し、文化と文明を生み出してしまふ。例えば火というイノベーション。

火のセイギヨ③が可能になったことで、調理が可能になり消化をスムーズに行えるようになり、また、どろろ獐猛な肉食獣を遠ざけられるようになった。さらに言語を使用し、情報伝達が可能になった。しかし、単なる五感による知覚だけでは、そのような自ら生み出した複雑な環境の中で生活をマネージできない。おそらく、それでもホモ・サピエンスが自然選択(淘汰)から免れ、今日まで生きながらえてきたのは、物語による出来事の把握、教訓化、伝達と継承、すなわち教育が可能だったからなのではないだろうか。

僕は「物語」を必要としている。

もう少し踏み込んで言えば、僕は神話を必要としている。

出来事と出来事を結びつけ、その因果連関を語るのが物語であるならば、科学も物語の一形態と言えるだろう。そして、科学とは正しい物語である。いや、正確に言えば、現時点で正しいとされている物語群の総称である(科学史を見れば、実は正しくなかったという科学理論や理論的存在者はたくさんある)。科学とは、僕らの持つさまざまな物語の中で最大の客観性と整合性を持つ因果連関の物語である。そして、多くの場合、再現性を有している。それゆえ他の物語と比べると、科学という物語では、そこで語られていることが真か偽かという観点が際立っている。その意味で科学とは僕らが獲得したこの世界の写しである。きちんとこの世界を写すことのできた物語を真であると見なし、世界を写し損なった物語は偽とされる。

しかし、正しくない物語は間違っているのだろうか？ つまり、「この世界の写し」としての真／偽という観点から見た場合に正しくないと言われる物語は、語られるべきではないのだろうか。そのような科学以外の物語は、現代ではもはやその役目を失っているのだろうか。

正しくはないが、間違っているとは言えない物語。僕は任意の言説は真か偽かのいずれかの値をとると信じている。認識における「排中律(注2)」を持っている。しかし、この排中律に抵抗することもできるのではないだろうか。というよりも、正しい／正しくないという二元論と

b

的に取り扱われるべき別の観点が必要とされているように思えるのである。言って

みれば、世界の写しとしての科学という物語と、それを補完する物語、つまり、科学と c 的である物語の存在を考えたみたいのだ。ではそのような物語とはいったいどのようなものなのだろうか？

物語には、正しい／間違っているという基準だけでなく、うまい／うまくないという基準で評価されるべきものがある。僕はそう考えている。

つまり、「真か偽か」「真実なのかそれとも虚構なのか」という観点だけでは物語の物語性を捉え損ねている。例えば「フィクション」というものは、そもそもそれが偽であり、虚構であるとわかりながらも、あるいはだからこそ、僕らはそこで語られる物語を十全に楽しむことができる。そして、虚構には虚構としての役割がいまだに残っている。いや、これから先の未来においても、人間がおよそ人間であり続ける限り、われわれは虚構を、つまり正しくはないが間違ってもいけない物語を必要としている。

この論点を考える際に鍵になるのは、正しい／正しくないという基準に並列される基準としての、うまい／うまくないという観点である。

では、ここで言う、うまい物語とはどのようなものなのか？ 言い換えれば、神話が有している機能とは何であるのか？

ここで一つの例を見てみよう。アニメ化もされた漫画『ゴールデンカムイ』^(注3)は、明治末期の北海道を舞台にした物語だが、その中で次のようなシーンが描かれている。アイヌの村に辿り着き、そこである登場人物の女性が出産する場面だ。アイヌの女性はその出産を手助けするのだが、彼女は周囲にいる三人の和人の男性たちに湯をわかし、ワラをたくさん集め、そこにいる幼児の面倒を見ることを指示する。そしてその後、ある神話的な所作を求める。

白を土間にはこび、白を前後に転がすようにと命じるのである。「ニスホリピレ」、白踊らせという安産のおまじないだといふのだ。白に宿る神への祈り。

d 的な意味での客観性や観測可能性という点から言えば、この信憑は偽であるとされるだろう。そのような「白に宿る神という存在者」を措定した理論は、他の科学理論との整合性を確保することが困難であるはずだ。それゆえ、現代の科

学理論からすれば、この白踊らせのまじないは切り捨てられることになる。

だが、僕が思うに、この白踊らせの神話は、うまい物語なのだ。

なぜなら、この儀礼によって、周囲の者たちに役割が付与されるからだ。現代の医学の観点から言えば、医師や助産師でない家族や周囲の者たちにはやってあげられることがない。何のケアをすることもできない。出番がないのだ。どれほど心配したり、気遣ったりしたとしても、具体的にしてあげられることがないのだ。

しかし、白踊らせという儀式があつたとしたらどうか？ 周囲の人間たちも、出産する女性の傍で、必死に白を前後に揺らすという役目が与えられる。神話という物語がまじないを発生させ、そのまじないが人に役どころを与えてくれる。「白を必死になつて転がす」という出来事と「母子ともに無事に出産できる」という出来事を結びつける物語がここにはあるのだ。その出来事間を繋ぐ線が神話として、その共同体内部で信じられている。

そして、それによって、さらにもう一つの効果もたらされる。

苦難や試練の中にある者はこう感じるはずだ。

誰かが、私のために祈っている。

私に向けて祈っている。

私は独りではない、と。

まず、神話が非専門家に役割を付与する。何者でもない者を、何者かにする。例えば出産という命がけの行為の、単なる傍観者ではなく、脇役に任命する。すると、バイプレーヤーがいることで、主演は孤独な主演ではなく、正当な主役となる。

科学は専門家を生み出しはする。だが、非専門家に役割を付与してはくれない。何者でもない者に、居場所はない。もちろん、科学の知によって、現代の僕らは多大なるオンケイを受け取っている。しかし、いわば神話の知によって、何者でもない者に居場所が与えられる。役割が与えられ、つながりが生み出される。

孤独が回避される。

正しくはないが、間違ってもいない物語とは、孤独への対処法なのだ。うまい物語とは、僕らが孤独に押し潰されないようにするための道なのだ。孤独を見くびってはならない。

孤独への恐怖は、自然選択が用意した業である。

e

的動物であることと引き換えに背負った業、こころと言語を

持つてしまった種としての運命。それを乗り切るには何らかの仕掛けが要る。物語、神話とはそのような仕掛けなのだ。

知というものが知恵を意味するのだとすれば、神話にも知が含まれていると言つてよい。というより、そのような神話の知も知であると、積極的に捉えなければならぬのではないか。僕らは、科学のような真偽の明確な体系、つまりこの世界の写しとしての理論だけを知と見なしてしまっている。しかし、知恵とは、人間の生にまつわる困難に対処するための方途全体を意味しているはずだ。知の拡張。かつて僕らが手にしていた知の全体性の回復こそ、現代に対する処方箋なのだ。「役に立つ」という表現があるが、白踊らせの儀礼は、周囲の人間に役を与える。だとすれば、こうした神話が役に立つと言つて、なぜいけないのだろうか。現代の僕らは「役」という概念を大幅に縮めてしまったのだ。物語が、神話が、僕らを「ケアの役」に立たせてくれる。

人は孤独である。それは抗いようがない。しかし、孤独感ほうまい仕掛けを施せば、少しの間、忘れることができる。

孤独をなくすのではなく、孤独感を一瞬でも忘れるために。

そのためにこそ、物語は、ある。

(近内悠太「孤独を忘れるためにこそ、物語はある」『ゲンロン』17 二〇二四年 ゲンロン 一部改変あり)

〔原注1〕 アーサー・C・ダント『物語としての歴史——歴史の分析哲学』、河本英夫訳、国文社、1989年、172頁。

〔原注2〕 同書、174頁、強調原文。

(注1) アーサー・C・ダント——アメリカ合衆国の美術評論家・哲学者。

(注2) 排中律——伝統的形式論理学で、根本原理の一つ。二つの相矛盾する命題のどちらかに真理が存することをいう。

(注3) ゴールデンカムイ——野田サトル作、アイヌの埋蔵金をめぐるサバイバル漫画。

問一 波線部①と②の漢字の読みをカタカナで書きなさい。また、波線部③～⑤のカタカナの漢字を書きなさい。

問二

a

く

e

に当てはまるものを次の選択肢(あ)～(か)からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、それぞれの選択肢は一度しか使えない。

- (あ) 相補 (い) 社会 (う) 客観 (え) 並列 (お) 虚構 (か) 現代

問三 傍線部アについて、筆者が考える「メール通りの出来事」と、「意味」とは何か。それぞれ本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問四

X

に当てはまる文章として適切なものを次の(I)～(IV)から選びなさい。

- (I) ある出来事Aをその時刻よりあとに起こる出来事Bとの連関によって語り出す装置
(II) ある出来事Aに関係するさまざまな人物について、その関係性を巧みに語り出す装置
(III) ある出来事Aとある出来事Bの間に起こるさまざまな事象について語り出す装置
(IV) ある出来事Aとその時刻の前後に起こった出来事Bとの相関を語り出す装置

問五 傍線部イについて、ジョーンズがマッチを擦ったという物語は何を示唆しているか。説明しなさい。

問六 傍線部ウについて、本文中の「引越し」と「白踊らせ」の二つの事例において、虚構が虚構としてどのような役割を果たしているのか、それぞれ説明しなさい。

問七 傍線部エのように筆者が考えるのはなぜか。本文中の言葉を用いて四十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部オのように筆者が考えるのはなぜか。本文をふまえて説明しなさい。

問九 本文全体を通して、「科学」との対義語として使用されている言葉を一つ挙げなさい。

二 一次の文章は、「小舎人童—女童」、「若い男—女房」、「頭中将—故式部卿の宮の姫君」の三者三様による身分相應の恋愛模様を描いている。小舎人童と若い男は頭中将に仕え、女童と女房は故式部卿の宮の姫君に仕えている。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①(注1)

祭のころは、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ、あやしき小家の半部も、葵などかざして、心地よげなり。

童への、相、袴清げにて、さまざまの物忌ども付け、化粧して、われも劣らじと挑みたるけしきどもにて、行きちがふは

をかしく見ゆるを、ましてそのきはの小舎人、隨身などは、ことに思ひとがむるも、ことわりなり。

とりどり思ひ分けつつ、物言ひたはぶるるも、何ばかり、はかばかしきことならじかしと、あまた見ゆる中に、いづくのにかあらむ、薄色着たる、髪はぎばかりある、かしらつき、やうだい、なにも、いとをかしげなるを、頭中将の御小舎人童、思

ふさまなりとて、いみじくなりたる梅の枝に、葵をかざして取らすとて、

梅が枝に深くぞたのむおしなべてかざす葵のねも見てしがな

と言へば、

しめのなかの葵にかかるゆふかつらくれどねながきものと知らなむ

と、おし放ちていらふも、されたり。「あな聞きにくや」とて、笏して走り打ちたれば、「そよ、そのなげきの森の、もどかし

ければぞかし」など、ほどほどにつけては、かたみに、いたしなど思ふべかめり。その後、常に行き逢ひつつも語らふ。

いかになりにけむ、うせたまひにし式部卿の宮の姫君の中になむ候ひける。宮など、とく隠れたまひにしかば、心細く思ひ

なげきつつ、下わたりに、人少なにて過したまふ。上は、宮のうせたまひける折、さま変へたまひにけり。姫君の御かたち、

例のことと言ひながら、なべてならず、ねびまさりたまへば、「いかにせまし、内裏などに思し定めたりしを。今は、かひな

く」など、思しなげへし。

この童、来つつ見るごとに、たのもしげなく、宮の内もさびしくすこげなるけしきを見て、語らふ。「まろが君を、この宮

に通はしたてまつらばや。まだ定めたるかたもなくしておはしますに、いかによからむ、程遙かになれば、思ふままにも参らねば、おろかなるとも思すらむ。また、いかにとうしろめたき心地も添へて、さまさま安げなきを」と言へば、「さらに今は、さやうのことも、思しのたまはせずとこそ聞けば」と言ふ。「御かたち、めでたくおはしますらむや。いみじき御子たちなりとも、あかぬところおはしまさむは、いとくちをしからむ」と言へば、「あなあさまし。いかでか。見たてまつらむ人々のたまふは』よろづつむつかしきも、御前にだに参れば、慰みぬべし』とこそ、のたまへ」と語りひて、明けぬれば、往ぬ。

かくいふほどに、年もかへりにけり。君の御方に若くて候ふ男、このまじきにやあらむ、定めたるところもなく、この童に言ふ。「その、通ふらむところは、いづくぞ。さりぬべからむや」と言へば、「八条の宮になむ。^(注24)知りたるもの候ふめれども、ことに若人あまた候ふまじ。ただ、^(注25)中将、侍従の君などいふなむ、かたちもよげなりと聞きはべる」と言ふ。「さらば、そのしるべして、伝へさせよ」とて、文取らすれば、「はかなの御懸想かな」と言ひて、持て行きて、取らすれば、⁽⁴⁾「あやしのことや」と言ひて、持てのぼりて、「しかじかの人」とて見す。手も清げなり。柳につけて、

「したにのみ思ひみだるる青柳のかたよる風はほめかさずや^(注26)

⑤ 知らずは、いかに」とある。

⑥ 「御返事なからむは、いと古めかしからむ。今やう様は、^(注27)なかなかはじめのをぞしたまふなる」などぞ笑ひて、もどかす。少し今めかしき人にや、

ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつつさぞみだるらむ

今やうの手の、かどあるに書きみだりたれば、をかしと思ふにや、まもらへて居たるを、君見たまひて、後ろより、にはかに奪ひ取りたまひつる。

「誰がぞ」と^(注28)掴み捻り、問ひたまへり。「しかじかの人のもとになむ。なほざりにやはべる」と聞こゆ。われも、いかでさるべからむたよりもがな、と思すあたりなれば、目とまりて見たまふ。「同じくは、ねんころに言ひおもひけよ。^(注29)物のたよりもせむ」などのたまふ。

童を召して、ありさまくはしく問はせたまふ。ありのままに、心細げなるありさまを語らひきこゆれば、「あはれ、故宮のおはせましかば」。さるべき折はまうでつつ見しにも、よろづ思ひ合せられたまひて、「世の常に」など、ひとりごたれたまふ。わが御上も、はかなく思ひつづけられたまふ。

いとど世もあぢきなくおぼえたまへど、また、いかなる心のみだれにかあらむとのみ、常にもよほしたまひつつ、歌などよみて、問はせたまふべし。

「いかで言ひつきし」など、思しけるとかや。

〔堤中納言物語〕所収「ほどほどの懸想」 一部改変あり

(注1) 祭——賀茂神社の祭。四月の中の酉の日におこなわれる葵祭。

(注2) 半部——部を半分にし、上半分をつり上げて開くようにしたもの。

(注3) 童べ——女童たち。

(注4) 相——上着の下に着込む衣。

(注5) 物忌ども——物忌みのしるしに、柳の木を削った札や忍草に「物忌」と書いて冠や簾に付けたもの。

(注6) 小舍人——小舍人童。近衛の中將・少將に召し使われている少年。

(注7) 隨身——上皇・摂関などの警護にあたる近衛府の官人。

(注8) 髪はぎばかりある——「髪は丈ばかりある」。

(注9) いとをかしげなるを——「いとをかしげなる女童を」の意味。

(注10) 頭中將——藏人頭兼近衛中將。

(注11) 葵——「葵」と「逢ふ日」とを掛ける。

(注12) ね——「根」と「寝」とを掛ける。

(注13) ゆふかづら——神事に用いる木綿ゆうわたで作った鬘かすね。木綿鬘から、つる草の意味である蔓かすねを導く。

(注14) くれ——「繰る」と「来る」とを掛ける。

(注15) 笏——束帯のときに持つ細長い板。

(注16) なげきの森——大隅国(鹿児島)の歌枕。「なげき」に「嘆き」と「投げ木」とを掛ける。「投げ木」の「木」に「笏」を連想させる。「なげき」ことをさのみ聞きけむ社やしろこそ果てはなげきの森となるらめ(『古今和歌集』・讀岐)をふまえる。

(注17) 式部卿の宮——式部省の長官。

(注18) 候ひける——女童が仕えていた。

(注19) 下わたり——下京。

(注20) 上——故式部卿の宮の北の方。

(注21) 内裏などに思し定めたりしを——故式部卿の宮は姫君を入内させようと決めていらしたが。

(注22) この童——小舎人童。

(注23) 君——頭中将。

(注24) 八条の宮——故式部卿の宮の屋敷。

(注25) 中将、侍従の君——ともに女房のこと。

(注26) よる——「繰る」と「寄る」とを掛ける。

(注27) 物のたよりにせむ——自分が姫君のもとへ通ったり、手紙をおくったりする際の手引きにでもしよう。

問一 傍線部①「祭のころは、なべて今めかしう見ゆるにやあらむ、あやしき小家の半節も、葵などがざして、心地よげなり」について、次の問いに答えなさい。

(1) この一文に用いられている修辭法を、次の語群から選んで記しなさい。

擬人法 省略法 序詞 体言止め 倒置法

(2) (1)の修辭法が傍線部①でどのように用いられているか。現代語で説明しなさい。

問二 傍線部②「いみじくなりたる梅の枝」が暗示していることは何か。現代語で説明しなさい。

問三 傍線部③「まろが君を、この宮に通はしたてまつらばや」について、小舎人童がどのように発言した理由を二点、現代語で説明しなさい。

問四 二重傍線部ア「さやうのこと」・イ「ありさま」とは何か。現代語で説明しなさい。

問五 傍線部④「あやしのことや」について、この発言には誰のどのような心情が込められているか。現代語で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「知らずは、いかに」は、「知るや君知らずはいかに」かららむ我がかくばかり思ふ心を『拾遺和歌集』・よみ人しらすの)の一部を引用したものである。傍線部⑤の前後に省略されている言葉を補って現代語に訳しなさい。

問七 傍線部⑥「御返事なからむは、いと古めかしからむ。今やう様は、なかなかはじめのをぞしたまふなる」を現代語に訳しなさい。

問八 本作品で描かれる三つの恋愛のそれぞれの特徴について、現代語で簡潔に説明しなさい。